

親鴨だより



1999年09月号

第156号

この10年間、日本社会の文化を大きく変えさせたキーワードとして、『国際交流』と『ボランティア』が上げられます。そして、国際文化活動に関する記事が、新聞・TVで取り上げられなかった日はなかったと言っても過言ではありません。今や、一般家庭の茶の間にも広がり、一方で、ほとんどの都道府県、市町村に国際交流の組織ができあがり、その活動の幅を広げ、活発にさまざまな活動が展開されています。

滋賀県には日本最大の湖、琵琶湖があることから、滋賀県は湖を縁に3つの国の州・省 — アメリカ合衆国のミシガン州、ブラジル連邦共和国のリオ・グランデ・ド・スール州、中華人民共和国の湖南省 — と姉妹若しくは友好提携を結んで、使節団の相互派遣や教育・文化・スポーツ・経済・技術・環境などの分野で交流が行われています。

私が退職する直前の1993年6月19日に、町民による国際化の推進母体として野洲町国際交流協会が、滋賀県内市町村の18番目の協会として誕生しました。誕生して2カ月後の8月には、ミシガン州クリントン・タウンシップと姉妹都市提携が調印されました。ご縁があつて、以来野洲町の交流事業に関わりながら、早いもので今年で7年目を迎えました。

近年、私たちの地域社会にも多国籍の人々が暮らすようになって、現在、滋賀県に在住する外国人は約2万人。野洲町には、約300名余りが在住しており、年々就労者やその家族が居住者として増え続けています。

私たち協会は、町民参加による国際交流活動をめざして、姉妹都市との派遣・受け入れ事業を始めとする交流事業、在住外国人との地域交流事業、町民への国際理解の啓発・普及事業、外国人に対する支援事業の実施など幅広い交流事業を進めています。

こうした「交流事業」を進めるなかで、姉妹都市クリントン・タウンシップ（デトロイト市から北へ約40マイルの静かな町）を始め、中国・南アフリカ共和国・ウズベキスタン共和国との親善交流などで交流の輪を広げ、友好の絆を深め、在住する外国人との「地域交流」で異文化への相互理解を深め、また、ボランティアによる「日本語教室」の開講、ほか、外国語による「生活ガイドブック」や「町内タウンマップ」の発行、生活相談など在住外国人への支援活動に努めています。

また、「地域交流」のなかで、会員以外にも参加を募っての国際交流パーティー、交流ハイキングやカルチャー教室も盛況で、『世界の料理教室』を在住外国人から教わるお国自慢料理教室は人気を集め、逆に彼らと『藍染工房』を訪ねたり、『ちぎり絵』や『陶芸』に取り組むなかで、私自身が地域の魅力を再発見することもあります。野洲町には他府県から移り住む人も多いだけに、こうした場をきっかけに住民同士の新しいコミュニティが育つケースが多いように思われます。かくいう私も定年後、隣の近江八幡市に住みついている一人です。

協会の活動の担い手は、小学生から年金族までの幅広い会員のボランティアであり、国際化を「人づくり」「街づくり」の視点で捉え、退職後の新しい人たちとの出会いを大切に、草の根交流活動に汗を流しています。

親鴨だより9月号に、第2の故郷野洲町の“国際交流活動”について、ご紹介させていただきました。

（野洲支部 小熊 俊夫）